

『昔の彼に逢えたら』

著：坂井朱生

ill：タカツキノボル

「会いたい」

森尾に頼むと、彼は困った顔をした。

「海に行こう？ どうしても行きたい」

いつもの我(わ)が侏(ま)のふりで、森尾にねだった。指定したのは引っ越し当日だ。一足先に母が郷里へ戻り、夕方に紺野が向かう段取りを決めた。

せめて最後の日、森尾に会ってから離れたかったのだ。

「その日、まずいかもしれない。他の日じゃ駄目か」

だがそんなこととは知らない森尾は、日程を聞いて返事を躊躇(ためら)った。

「どうしても、この日がいい」

だって、次の日にはもう、ここにはいなくなる。あれこれ理由をつけて延ばしていたものの、もう限界だった。荷物はほとんど祖父の家へ送り、あとは身一つで移動するだけだ。

(最後、だから)

どうしても会いたい。会って、今までと同じように、普通の高校生みたいに一日たっぷり楽しんで、森尾と二人だけですごしたい。そうして、別れ間際に引っ越しや事情を告げよう。

遠くなるけど、ときどき会いたって言えるかな。

口約束だけでもいい。離れても森尾と繋がっていられると思えば、それでやりすごせるような気がした。

——けれど約束の日。待ちあわせた時間、とうとう森尾は現れなかった。午前中に約束したのに、昼をすぎ午後だいぶ経っても、彼は来ないまま。

紺野は厳しい父親に禁じられ、携帯電話を持っていなかった。連絡をしようにも、目につくところに公衆電話はない。この場を離れ、もし森尾とすれ違いになったら。怖くて離れられないまま、ひたすら彼を待ちつづけた。

待ちあわせたホームは暑く、寝不足の紺野はふらついてもいた。水分を補給しなかったせいか、頭痛もひどい。

「……必ず行くって言ったのに」

ぽつんと呟いた言葉は、ホームのざわめきにまぎれて消える。

わかった、どうにか都合つける。必ず行くって、そう言ったのに。

じわりと目頭が熱くなった。泣きだしそうなのを、懸命にこらえる。駅のベンチに座りこんだまま泣いたりしたら、明らかに不審者だ。

「帰ろう」

動きたがらない自分に言いかけようと、紺野は声にだして言った。

これだけ待っても来ないのだ。もう、いくら待っても無駄だろう。

もし森尾が家へ連絡をくれていても、その連絡を受ける者は誰もいない。今朝早く、迎えに来た祖父とともに、母はあちらへと行ってしまっている。

祖父の家へ着いたら、父の望みどおりに離婚する手はずになっている。この日まで暮らした家には父親が暮らすのかそれとも売ってしまうのか、いずれにしろ、二度と紺野が戻ることはない。

紺野は重い腰をあげ、のろのろとホームを離れた。コインロッカーに預けてあった小さな荷物を引っぱりだすと、祖父の家へと向かった。

それ以来、森尾とは一度も会っていない。話もしないままだ。

ずいぶんと経ってから、あのころの自分はたぶん、身に降りかかった状況に酔っていたのだと思うようになった。どうして俺がこんな目にとそればかり考え、腹をたてて苛ついて、荒れた気分を森尾にぶつけていた。

自分の不運だけで精一杯、周りなど見えなくなり、森尾の気持ちも見失っていた。会えば喧嘩ばかりしていたのに、用があると云った森尾を無理に呼びだそうとして失敗した。自業自得だったのだろう。

けれど、必死だった。二度と森尾に会えないかもしれないとそればかりで頭が埋めつくされていた。そうして残ったのは一人きり残されたホームでのつらい気持ちと、落胆と、絶望だけだ。

(どうしても来られないなら、言ってくれたらよかったのに)

朝でもいい。せめて紺野が家を出るまでのあいだに連絡をくれていたら、一人で座りつづけることもなかった。そんなふうにして、ひたすら悲しくて悔しくて腹がたって、祖父の家へ行ってからも、森尾には連絡しなかった。

怒りが収まったころにはもう、森尾に連絡をとる時期を逸(いつ)していた。

今さら、と。来なかった相手に未練がましく縋(すが)りつくのか、どうせもうろくに会えもしないのにと諦め、それきり森尾を忘れようとした。

母親が再婚し、祖父が逝き、今は一人だ。狭いアパートだが寝る場所もあるし、給料は高くなくてもどうにか暮らしていける職もある。

残ったのはただ一つ。苦い夏を封印したあれから、夏が嫌いになった。

本文 p32～36 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>